

です」とただ命名するようなフォーマルなことばだけでは言いあらわし得ない。そして今自分が味っている状態を表現するのだから相手のことを意識して発言するというよりはむしろ自分に言いかけせよのようなニュアンスを持つてくると思う。このことは自分自身に関心が集中しがちになると言え、c・pでは反対に、画面や自身に熱中するより対人意識の方が強いというふうな考えられる。

結論としてc・pでは形色、画題、評価などフォーマルなテーマによる単純な言いかけ、意志表示が行なわれやすく、二人の人間関係はフォーマルな形で成立しやす。一方f・pでは自分の行動に没入しやすく、対人意識はうすらぎ、個人的な、より深い表現になつていく。

個人的な深いものが相手との関係にどう影響するかは今後の研究課題であるが、刺激の多くなった社会の中で、充分にウォーム・アップし、まわりの状況に適応していく自発性をやしなうことは保育の最も大きな問題であると思うので、f・pのこうした角度からの研究に重点をおいている。

(大会抄録27-30頁)

幼稚園における

カウンセリングの一方式

(第三報)

栄光幼稚園 日名子太郎

愛育研究所 多勢 豊次

1 目的 前回に引き続き、幼稚園におけるカウンセリングの方式、並びに、その結果を実例よりまとめ、特に保育面における社会生活参加状況に関する評価と治療効果との関連を中心に考察した。

2 経過 全体の方式は、既報の如き方法に従い、とくに、社会性を欠きグループ・セラピーを必要とすると思われるもの一〇名(内訳年少児4名、年長児6名)を選び、一年間、二〇回にわたる毎週一回、一時間セラピーを実施した。

そして、その効果を、対仲間、対治療者、遊びの状態について、五分おきに、四つのカテゴリー(A、B、C、D)にわけて記録した。そこでは、対仲間遊びの状況の二つにつき、最も積極的状態を示すカテゴリーAの%による変化をグラフに描くことによって示し、日常保育の場面における状況は「園生活参加の状況に関する評価基準表」(抄録参照)により評価、この両者を比較した。

3 結果の考察

日常生活の状況及びセラピー時における状況に関して、一応、前記のような評価法を採用したが、これら評価の方法は、未だ完全なものと言えぬ試案であるが、整理の方法としての一案として提出した。

この結果について、個別に考察してみると、ともかく、何れのケースも、学期を追って、集団生活へ参加できるようになる社会性発達の状況がうかがわれる。

今後は、さらに、評価法の研究によって、総合的な効果判定、整理の方法について明確にしたい。

(大会抄録30-34頁)

幼児保育とサイコセラピー(その二)

(事例を中心に)

愛育研究所 権 平 俊子

榎 由美子